

要旨

中井文庫蔵 赤本『笠ハさま／＼三度いせかさ』は、従来、存在が知られていなかった赤本である。全文を翻刻し、内容を検討した結果、当時流行の歌謡と、歌舞伎で上演された〈せりふ正本〉の本文が掲載されており、せりふの本文には「枕」の趣向が用いられていた。また赤本と〈せりふ正本〉とが、非常に近接した関係にあり、刊記のない赤本だが、せりふ正本の考証によって刊行時が推定できた。

abstract

The Akahon "Kasa ha-samasama Sando isekasa" is a previously unknown Akahon (redo cover book) in the Nakai Bunko collection. As a result of reprinting the entire text and examining the contents, I found that it contains both the popular songs of the time and the text of the "serifu" which was performed in kabuki, and the text of the sereifs uses the "pillow" style. In addition, the Akahon and the Serifu Shohon are very close to each other, and although the Akahon has no publication record, it was possible to estimate the time of publication of this book by examining the Serfu Shohon.

中井文庫蔵 赤本『笠ハさま／＼三度いせかさ』とせりふ正本

はじめに

奈良県御所市の中井家は、文政三年から天保十三年（一八二〇～一八四二）まで当地で庄屋を務めた旧家で、主屋に寛政四年（一七九二）の棟札があり、二〇〇七年に「中井家住宅」として国の有形登録文化財に指定されている（非公開）。中井家代々にわたって広く収集された「中井文庫」は当家にあり、その蔵書は、江戸時代を中心に古文書、写本、版本あわせて、約二〇〇〇点に及ぶ。現在の御当主の中井陽一氏御自身も「中井文庫」の古文書と蔵書構成の研究をされており、立命館大学アート・リサーチセンターでは、二〇二一年から蔵書の画像「中井家コレクションの世界」が公開されている。

<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/vm/nakai/>

赤本『笠ハさま／＼三度いせ（伊勢）かさ』（画工、近藤清春。無刊記）はその蔵書の一本であるが、木村八重子『赤本黒本青本書誌 赤本以前之部』（日本書誌学大系95（1）青裳堂書店、二〇〇九）、および浅野秀剛解題『近藤清春作画どうけ百人一首三部作』（太平文庫17、太平書屋、一九八五）所収の「付・近藤清春全作品目録」には掲載されておらず、ほかの所在も知らない。木村八重子氏には、先年、「中井文庫」を調査されたさいに、本書のあることを御教示いただき、内容についての御下問にも与ったが、此度、本書の画像が公開されたのを機に、翻刻を兼ねて若干の考察を試み、ここに報告するものである。

本書の本文は、歌謡一種と〈せりふ〉二種から成る。歌謡は「かるい沢ふし」、〈せりふ〉の「はり 枕ころへせりふ」、二は「くるわ 相撲の行事せりふ」である。「かるい沢ふし」は、上下がほぼ二分の一に分けられるが罫線はなく、上部に詞章、下部は図版である。〈せりふ〉は上段三分の一を罫線で横に区切って首書の体裁で掲げ、下段に図版を配して、図中の余白に人名や会話などを書き込む。この型式は初期の赤本には時折り見られるもので、これを木村氏は、「上部に仕切り線を設けて文句、下に絵の型式」、浅野氏は、「上部三分の一が文、下部が絵と書き込み文（あるいは、会話文）」と、それぞれ前掲書で記述されている。いずれの記述も正しく、多くの赤本のように、本文が図中の余白に散らし書きにされる型式とは明瞭に区別できるが、同時に、享保期の数点の赤本が、この首書の型式であることが注目される。ついで、類似の型式の絵本・狂言本との比較の便を考慮し、小稿では、仮に〈首書型〉と称しておく。

なお、木村八重子、浅野秀剛両氏の前掲書より、享保期に刊行された近藤清春画の赤本で、首書型の書目を抽出すれば、次のとおりである。すべて中本一冊。全五丁（欠丁分も含む）。

①享保十三年（一七二八）刊『花うしろう（花かづら）』（仮題）。板元未詳。大東急記念文庫。鈴木重三・木村八重子編『近世小どもの絵本集』江戸篇、所収、岩波書店、一九八五。齊藤千恵「赤本」「花うしろう」について―市川宗家の「外郎売」との関連を中心に」、鈴木淳・浅野秀剛編『江戸の絵本―画像とテキストの綾なせる世界』所収、八木書店、二〇一〇。

*上段にせりふを載せる点で類似。

②享保期、『工夫富貴長命丸』（内題）。板元 未詳。国会図書館。神保五彌編『新潮古典アルバム二四 江戸戯作』一九九一。木村八重子「赤本」その後『江戸文学』35、ぺりかん社、二〇〇六、十一月。

③享保期、『もんまきぶつなりやきかうかぬ』（題簽）。板元、江戸横山町、近江屋九兵衛。東京都立中央図書館加賀文庫。『近世子どもの絵本集』江戸篇、所収。

④享保期、『めいとさんげ物語』（内題）。板元、平野屋善六カ。東京都立中央図書館東京誌料。

⑤享保期、『ぶんぶくちやがま』（題簽）。板元、井筒屋忠左衛門。国会図書館。『稀書複製会』五編、所収、一九二八。『近世子どもの絵本集』江戸篇、所収。

一、書誌

体裁 中本一冊。一八、七×一三、三糎。

表紙 元装、丹色。

題簽 表紙左肩。子持罫絵題簽、一四、五×七、五糎。男女二人の踊り手が両手に笠を持つて踊る図。外題「笠六さまく〜三度いせかさ」。下部右端に「通あぶら町」、左端に「(商標)丸に三星 いせ屋板」。

丁数 五丁。

板心 柱刻に「せりふ」。丁付「一(〜五)」。

画工 「畫工 近藤助五郎清春筆」(二丁表)。

本文 首書型。

刊記 なし。

板元 江戸通油町 伊勢屋七郎右衛門カ。

印記 表紙見返しに「中井文庫」。二丁表右下に「月明荘」、五丁裏左下に「月明荘印」。月明荘は弘文荘主人反町茂雄。

備考 1 「中井文庫」番号1222。外題の「笠六さまく〜三度いせかさ」は、一丁表「かるい沢ふし」の詞章による。

2 『弘文荘待賣古書目』第十六号(昭和十六年六月)に、(211)

「赤本『笠六さまく三度伊勢笠』享保頃刊 近藤清春画 全一冊 金九十円」とあり、一丁表の写真を掲載する。「赤本としては珍しく俚謡とせりふ尽しなるを珍とすべし」、および「五丁ウラに破損」という説明が本書に一致する。印記参照。

二、翻刻

【凡例】

1 本文の用字、改行はすべて原本通りとし、清濁の位置の違いは正した。難読箇所には「」を付し、最小限の語に漢字を宛て、() に示した。

- 2 句読点がないため、一字空けて区切りとした。
- 3 改丁は、各丁最終行の()内に丁付と表・裏を示した。
- 4 図版については、見開き一丁ごとに首書と図を掲げ、図中の囲み罫は一部を除いて省略し、ちらし書きは「」を付した。

【本文】

画工 近藤助五郎清春筆

かるい沢ふし

▲枕さまくくくり枕 はり

まくら 君ハミセン (三味線) まくらに

わたしがせうね (性根) のひざ

まくらく 「むりに せうね になら んすかへ」

▲かさハさまくく二じ

いせ (伊勢) 笠 かつさがさ 君の一代

めすのが しなのゝ女郎衆の

思ひ笠 よし原女郎衆の

おもひがさく

▲ふねハさまくくじやくほうわう (孔雀鳳凰)

あたけ丸 よしの川いち

吉原かよひのひきやく

ふねく

▲こんどきてきたぐぜい (弘誓) のいけに

かも (鴨) がさん九ツ からす (鳥) が

三ばに う (鶉) が七ツく (二丁表)

はり 枕そろへせりふ

▲そうしてまくらのしな

くハ かゝ代のむかし 哥

まくら ことばのまくら か

ずくゝにそのかたん (邯鄲) の

かり枕 (まもろ) の

なんしよく (男色) にかのほくわう (穆王)

のわかしゆさま じじょう

のこへしながまくら す

て「おも」ひのひぢ枕 ま

くら物にやくる「ふ脱力」らんねる

もねられず おきもせ

す あとよりこひのせめ

くれば せんかたまくらだい

てねん あふよのきみの (二丁裏)

てまくらに きうなをし

ゆびの はながミまくら

こぬよおのがそでま

くら まくらあまりて

とこひろし せめてほと

いてふミまくら (文枕) くくり

まくらのくちしめでふ

すい (伏す猪) のとこのくさまく

ら こいくさか (刈) りてか

まくら むろ (室) のミなど

のかまくら とうじ

ミやげのぎちくまく

ら まぶにあふよのと

こふち (床縁) まくら 二丁う

たち (挺立) にハひきだしま

くら いせ丁ふな町の (二丁表)

せんさい幸之助

「上手だの」

さんばさう半太夫

「いよふでむらさま」 (図一丁裏)

ふへ七郎兵衛

小つとシシひ七

小つとシシ茂左衛門

大つとシ中山太郎次

おきな竹た源介

「おきや〜よまごひやりや」(図二丁表)

そろばんまぐら ゆやの

あがりのおけまぐら 八

くわん町にハまるたのま

るたのまぐら どりふり

町のげたまぐら 両がハ

町のでんびんまぐら せん

いんごんまぐら すすまへ

らいしやのびんくわでやげ

ん(薬研)のまぐら ぼん(盆) におてり

でほうかいまぐら 大くぐり

のうち枕 こめつきや

すむきねまぐら かがか

き(駕籠舁)のまぐら またまへり

まご(馬子)しゆもごらやぶ

くつまぐら はたやぶ

だすひつきりまぐら り(二丁裏)

やうし「の」ふねのあし

くらとま(苦)をしきねの

かぢ枕 う様がたにわ

きやらまへり(伽羅枕) しもの

らくしきまぐら のん

しきふたたるまぐら よ

さめ枕 に(新)まへり いも

せ(妹背)の中やぬりまぐら(塗枕) とう(十)

つとら(十)をば(枕) かず

〜ありといふなかに

このはりまぐらと申

せしハ かのやさおんな せ

いしやうなごん(清少納言)がかきあ

つめたるそらうしした

かき あつめてはりて

ぬりこめて めん(院)のしん(三丁表)

しよ(寝所)ゑあけしよりは

りまぐらとてもてはや

す それゆゑぞうし(草子)もせ

いせうなごんまぐらぞう

しともうすとかや

けにもそうよの やよき

みにさせたや ねたや う

りたやな みなさまも

思ひのまぐらこうてね

てくださいせ まぐら〜

はつあ まへりハ

おぎのい二郎様 (図二丁裏)

とシ五郎様

小まつ様

シハの様 (図二丁裏・三丁表)

くるわ 相撲の行事せりふ

▲そも〜すまふ(相撲) はじ

まりといつは 天ぢくり

やうじゆせん(霊鷲山)にて 大ばだ(二丁裏)

たつた(提婆達多)といふげとう(外道) ふつ

ほう(仏法)をさまたくるしやかに

よらい(釈迦如来) だいはがあくをしづ

めんと 十六らん(羅漢)のめし

あつめ ぢうろくらかんに

三ばん一とくのせうぶを

このシ給ふわがてう(我朝)にをい

てこれたか(惟高) 是びと(惟仁) くに

あらしひのとき すまぶの

かちまけによつてへんじ

をさだむ まつたこのす

まぶハ かちまけによつ

てたかいのきつけう(吉凶)をしる

それ入それ これわ是

わかさと(我廓)のすまぶのは

しまりといつは 多く(四丁裏)

しやくとう藤ひやうハ

「おくにはとおや政之助」

よしまさおんなと成ル

「もくさぶこのまめか」(図三丁裏)

ばんざへもんもくさぶり

「なになくおつれた」

ばんざへもん女ほうおくに竹三郎

「つち人ハここにたな」(図三丁裏・四丁表)

ち(江口)のきんやちせうせ

三十二せう(相)のかたち

「お」おやハ此きんや三

ばんざへもんせうちを

このシ あまねくつう(通) お

うしなひしより此かた

すまぶのやらい(矢来)をきやく

し 大せきをたゆふ(太夫) ハき

させき(関脇力) おてんしん(天神) かひ(囲) 小むすひをさんちや(散

茶) む

めちや(梅茶)とあらためぎやう

し(行司)かわつてやりて(遣り手)とか

やさてまたうちハ(団扇)わこ

さかつき(小盞) どひやう(土俵)にハ

とこ(床)にならべしながま

くら(長枕) ゆミ(弓)ハしやミせん(四丁裏

つる(弦)ハいと 四ほんばしら

ふふたりねのほにあらわ

れしなにハのあしと

ひやういり(土俵入り)にわ たそが

れに びをつくしたる花

こそてすあし(素足) つまハ

に(端紅)はぎ(脛)たかく ゆらりく

とめてしめがほ てかほ

ミせりや すい(粹) ほどはま

るふとろ子 たい(抱) つだか

れつ しめつゆる「め脱力」つ四十八

て申せ共 とうせいわか

づまして八十八てなげ

に「か」つてハ おやにかかりし

ふとろ子 ころりと

わすい(入) れぼくろ(黒子) ありべ(五丁表)

半太夫

「千とせとの こなたしやぞ」

「きやうじ (行司) おうしう」

「ちへら川」

「とうざい〜にしの方より (五丁裏 あして」

ことうち

千とせ

山ふき

「見花」

「みはな (見花) さまのつきわ春風とのてごんしやう」 (図四丁裏・五丁表)

かゝりのそらぎせう (空起請) な

お〜かきにかきとむる

またのげけん (御現) をちか〜

とかしくとむるやほ

すまふ (野暮相撲) しなきやんまい

あくせう (悪性) も ゆつてくづし

のはやくら あけつおろし

つあせかいて つい三ば

んのすまふもすきい

もせ (妹背) わりなきなか〜

にしひてあふつまつ

りて これめいしんのわざ

とかや さればたせぬこ

ぶきを つらね〜て山

どりの うきな (浮名) をよら

も〜と〜し やま (五丁裏)

「京都の下りまくら」

「重治郎枕うりのせりふ」

「む〜のよ〜ま〜へ〜む〜」

「ばんぜいのこぶぎ」

「うちハめせ〜 いろよいうち」

竹之丞うちハうり (図五丁表)

三、〈枕尽く〉の趣向について

一丁表の歌謡、「かるい (軽井) 沢ふし (節)」「は、短い四節の詞章から成り、一は〈枕尽し〉、二は〈笠尽し〉、三は〈舟尽し〉、四は〈鳥尽し〉」になっている。下段の図版には、箱枕、三味線枕、伊勢編笠が反映されているようである。本書の外題、『笠六さま〜三度いせかさ』は、二の〈笠尽し〉の詞章の冒頭から採られているが、一丁裏以後に続く「はり 枕そろへせりふ」「くるわ 相撲の行事せりふ」の本文よりすれば、これらの〈せりふ〉は明らかに、一の〈枕尽し〉からの連想によつてつながっている。「はり 枕そろへせりふ」については言うに及ばず、「くるわ 相撲行事せりふ」もまた、まずは前半に「そも〜すまふ (相撲) はじまりといは」と、その起源を説くが、後半は「それこそこれわ是」と転じ、「わがさと (我廓) のすまふのはしまり」を述べて、以降は、廓の遊びを相撲に見立てている。すなわち、太夫を大関に、天神を関脇に、散茶・梅茶を小結に、遣り手を行司に、あるいは、小盞を団扇に、というごくくである。これに続く〈せりふ〉の中の一句に「どひやう (土俵) に」と(床) にならべしながまくら (長枕) 」。という。土俵に見立てて円形に連ねた長枕は、廓の相撲には欠かせないしつらえで、四丁裏・五丁表の見開き【図一】は、まさにこの場面の枕を描いたものである。



【図1】四丁裏・五丁表

さらに、五丁裏には、手付きの盆に箱枕を乗せて売り歩く、枕売りの姿が描かれ、書き込みに「京都の下りまくら」、囲み野に「浅尾重次郎枕うりせりふ」とある【図2】。これは、後述するように、宝永六年（一七〇九）十一月に京都から江戸山村座に下った若女形、浅尾十次郎（十治郎、重次郎とも）の当たり芸であるが、要するに、本書は「かるい沢ふし」の〈枕尽し〉の歌謡にはじまり、二種の〈せりふ〉を通じて、枕の趣向で一貫していると見なせるのである。いわば、全体が広い意味での〈枕尽し〉になっているといえるであろう。

五丁裏の左端に描かれたもう一人は、五本の団扇を背に差した団扇売りで、囲み野に「竹之丞うちへり」とある【図2】。一部に破損があるが、裾に橘の紋が見えるので、市村竹之丞であろう。団扇に描かれているのは役者の紋で、上から順に、立役村山平右衛門、若女形松本重巻、若女形筒井歌之助、実恵早川伝五郎、立役三升屋助十郎である。いずれも浅尾十次郎と同時期の江戸の役者で、竹之丞の団扇売りの上演記



【図2】五丁裏

そうであれば、本書が枕の趣向を構想したきっかけは、五丁裏にあるように、「浅尾重次郎枕うりのせりふ」であったとみて、差し支えあるまい。書誌に掲げた板心の柱刻が「せりふ」であったのもここに帰するのであり、一書の編成としては、結局、最後に「浅尾重次郎枕うりのせりふ」に回収されるように仕組まれていたとも考えられるのである。次に、当時の浅尾十次郎の動静を伺っておく。

四、「はり枕をへせりふ」と浅尾十次郎

浅尾十次郎の江戸下りについては、生島新五郎の口上に、次のようにいう。

「十ヶ年以前、都万太夫座へ上りました時分（元禄十四年七月、「神事曾我」の曾我五郎）、浅尾十次郎と申女形と縁を結び置きました。それゆへ達て申上せ、やう／＼よび下しました」（宝永七年三月『役者謀火燧』江戸）。

録は確認できていないが（あるいは、この図によって、団扇売りを演じたことが推測されるが）、この図は、相撲の行司の持つ軍配団扇の縁で、団扇を描いたものであろう。「くるわ 相撲行事せりふ」の四丁裏には、「小むすひ（結）をさんちや（散茶）むめちや（梅茶）とあらため、ぎやうじ（行司）かわつて、やりて（遣り手）とかやさてまたうちハ（団扇）わこさかつき（小蓋）」とあって、以下は、先に引用した「どひやう（土俵）にハと（床）にならべしながまくら（長枕）」に続く。廓の相撲では、遣り手が行司を務めたことと、【図1】四丁裏の図では、「ぎやうじ（行司）おうしう」が軍配団扇を持っているが、その紋は浅尾十次郎の紋なのである。

十次郎は、新五郎の達ての頼みで、宝永六年霜月、江戸、山村座に下り、新五郎の引き合わせで顔見世に出勤、「泰平阿国歌舞妃」の阿国となったが、これは振るわず「ぶ当り」であった。

丑（宝永六年）の霜月三初て山村座（下り給ひ、お国かぶき（泰平阿国歌舞妃）ぶ当り成し、明ル寅（宝永七年）の初狂言けいせい伊豆日記（傾情伊豆日記）。なまりけいせいにて大当り。三年山村座の立物、枕／＼はり枕でいよ／＼名高く。此度山村座のお勤。（略）今お江戸若女の巻頭は此浅尾殿（正徳三年四月『役者座振舞』江戸）。*傍線、廣瀬。

右のとおり、江戸では「枕／＼はり枕でいよ／＼名高く」なり、若女形の巻頭になったのであるが、しかしながら顔見世の「泰平阿国歌舞妃」、翌年正月「傾情伊豆日記」のいずれにも、「はり枕」のせりふを述べたという確たる形跡は見あたらず、「此度」、すなわち正徳三年には、十次郎は山村座に移っている。山村座に居た「三年」というのは、宝永六年霜月から、七年、八年（正徳元年）、正徳二年の、実質三年間である。間の時期の上演であれば記録に残らない場合もあり、上演時とその演目は確定できないが、「はり枕」のせりふが述べられたのは、この期間であろう。

「浅尾重次郎枕うりのせりふ」については、『せりふ大全』（中本一冊。無刊記。宝永六年頃刊と推定。早稲田大学演劇博物館蔵。「106-0078」）に所収の本文と、刊年不明ながら、上方板の浅尾十次郎（枕売り）のせりふ正本、三種が残っている。『せりふ大全』は七種のせりふを集めたせりふ集で、脇方箋に「市川もぐさ売／＼浅尾まくら売／＼たんせんらく／＼風流な／＼屋／＼きんひら馬上／＼くわんく／＼つぢぞう／＼鳥づくし」とあり、表紙見返しに市川団十郎のもぐさ売りと、浅尾十次郎の枕売りの図を載せる。また、冒頭四丁分の板心には「せりふ 壱（二・三四・五六）」の柱刻がある。以下の柱刻は丁付けのみで「七（八・九・十・十一）」である。丁付けに少々乱れがあるが、壱・二丁は「（紋）もぐさ売せりふ 市川団十郎」（内題）、三・四・五六丁は「（紋）枕そろへせりふ あさを重次郎」（内題）である。「枕そろへせりふ あさを重次郎」は、用字・改行などに小異はあるものの、本書、『筈六さま／＼三度いせかさ』所収の「はり枕そろへせりふ」とほぼ同文である。

市川団十郎のもぐさ売りは、宝永六年七月、山村座上演の「けいせい雲雀山」の、くめの八郎役で演じられており（早稲田大学資料影印叢書国書篇二十五巻『絵入狂言本集』所収、一九八九）、このことをもって、『せりふ大全』は、宝永六年頃の刊

行と推定されている。浅尾十次郎が江戸に下ったのは、やや後の、宝永六年霜月であったが、「枕／＼はり枕でいよ／＼名高く」なり、その噂はしばらく続いた。『せりふ大全』もまた、先述したように、柱刻に「せりふ」とあり、団十郎と十次郎のせりふ二丁分を二種一組として収載しようとしたものであろう。なお、続く「たんせんらく／＼う（丹前頼光）」以下の丁では、本文は追込みである。

上方板、浅尾十次郎のせりふ正本、三種は次のとおりで、いずれも、「はり枕そろへせりふ」とほぼ同文である。

① 絵表紙・紋。

板元「大坂ふしミ両か（町いとや市兵衛板）」

表題「せりふ まくらうり」

内題「まくらぞろへせりふ」

② 絵表紙・紋。

板元「勝尾屋六兵衛板」

*住所は大坂御堂筋から物町北へ入。

表題「浅尾十次郎 枕売せりふ」

内題「まくらぞろへせりふ」

③ 絵なし。紋。

板元「京寺町通竹屋町下ル ふぢや板」

表題「浅尾重次郎 狂言せりふ まくらうり」

内題「枕そろへせりふ」

上方板のせりふ正本には、浅尾十次郎の（枕売り）のほかにも、市川団十郎の（もぐさ売り）（ういろいろ売り）、坂田半五郎の（反魂丹売り）（飛だん／＼売り）（鮎売り）、三升屋助十郎の（あぶら売り）（たば／＼売り）（かわらけ売り）（扇売り）、藤村太夫の（ひや水売り）、森田勘彌の（と／＼ろてん売り）ほかがあるが、共通するのは、表紙に上演演目が記載されていない点であり、そもそも、上方板である所以も未詳である。また絵表紙の場合の絵の印象は、判明する上演時より年代が下がるようである。詳細は別稿に譲るが、（物売りせりふ正本）の場合は、上演時の即時性をはなれても需要があったのではないかと考えている。なお、拙稿「江戸歌舞伎（物売り）せりふ正本考―『金之揮』の記事をめぐる」（『同志社女子大学日本語日本学』第二十七号、二〇一五）にも小稿に関わるところがある。

以上の様相を勘案すると、赤本『笠六さま〜三度いせかさ』がせりふ正本を撰取する方法は巧みで、本文と図版が相互にせりふの周辺を反映していたと言えるであろう。赤本とせりふ正本は、きわめて近い関係にあった。赤本の題材が子供向けとは限らず、多様な要素をもつことは、近年の事例によつて明らかにされているが、せりふ正本もまた、その一端として、大いに歓迎されたであろうと思われる。それにしても、「はりまくらそつへせりふ」も、「くるわ相撲の行事せりふ」も、内容は「枕」に材をとつた大人の色遊びに関わるものであり、近現代の感覚では、子供向けには不似合いかと思われるが、その判断は保留しておく。

五、「はりまくらそつへせりふ」と本書の刊年

ところで、本文にふれるところはないが、三丁裏・四丁表には、廓の格子前で、もぐさ売りの荷箱に左脇をつく、市川団十郎のもぐさ売りが描かれ、囲み野に「はりまくらそつへせりふ(伴左衛門)もぐさ売り」とあるのが注目される【図3】。団十郎の伴左衛門とは、「盆替り(正徳五年七月、中村座『三ますなごや』)不破伴左衛門、関八州に御存の団十郎もぐさと、自身名のりてもぐさ売(正徳六年正月『役者願紐解』江戸)のこと、先述の宝永六年七月の「けいせい雲雀山」に次ぐ、もぐさ売りの上演である。本書の廓の格子前の構図は、狂言本『けいせい雲雀山』と類似の図様で、これを踏襲した可能性も考えられる。とすれば、浅尾十次郎の「はりまくらそつへせりふ」は、宝永末年ごろのせりふ正本を撰取しているとしても、十次郎の動静を考えれば、先述の市村竹之丞が描かれているのは、正徳三年、十次郎が市村座へ移ったことにちなむものであろうし、本書の刊行も、不破伴左衛門のもぐさ売りの上演以降でなければならず、よつて、『笠六さま〜三度いせかさ』の刊年は、正徳五年七月以降と推定されよう。本書は、せりふの上演を核として、宝永末年から正徳五年頃の江戸劇界の様相を反映したものと位置付けておきたい。なお、一丁裏・二丁表の図は、正徳三年十一月、中村座『女楠天下太平記』三番目の三番叟で、藤村半太夫の三番叟、竹田源介の翁、中村幸太郎の千載。囃子方は正徳二年と一致することを附言しておく。

二丁裏・三丁表は年次不明、顔見世の芝居小屋前の情景であらう。



【図3】三丁裏・四丁表

【付記】

小稿は、二〇二二年十二月十八日、京都近世小説研究会、オンライン例会における口頭発表にもとづいている。当日の参加者、ならびに席上で印記についてご指摘いただいた宮川真弥氏、難読箇所について助言をいただいた近衛典子氏に謝意を表します。

〔注〕

- 1) 大英博物館蔵、画工未詳の『まつのうち』は、首書型で歌謡の詞章を載せる。佐藤悟「逸題赤本『まつのうち』影印と翻刻」(実践国文学、第五十八号、平成十二年十月)。
同氏「草双紙に関するいくつかの疑問」(江戸文学、35号、二〇〇六、ぺりかん社)は丹表紙中本の薄物正本にふれる。なお、首書型ではないが、大英博物館蔵『なこや山三』は芝居絵本の体裁である(同氏「赤本『風流なこや山三』について」(実践国文学、五十七号、平成十二年三月)。
黒木祥子「近藤清春の歌謡絵本―『赤本寄本』について―」(歌謡研究と資料、一号、一九九八、十一月)は、『時花唄』(新編稀書複製叢書6所収)の歌謡との関係に言及する。
萩田清「赤本「ぎおん大まつり」考」(藝能史研究、70号、一九八〇、七月)は、東京都立中央図書館加賀文庫蔵、奥村政信画『ぎおん大まつり』を紹介し、「江戸の操座土佐座の資料として看過できぬ」という。
2) 西鶴『色里三所世帯』(貞享五年六月刊)巻上「一、恋に関有女相撲」に、「小ふとん」を並べた女相撲の土俵の挿絵がある(濱田泰彦氏の助言による)。なお、本文に取り手について、「関脇(せきわき)」の用例がある。